高齢化社会はすぐそこに
5人に1人は65歳以上（昭和90年）

21世紀に向って急速に進行する高齢化社会は、医療、年金、雇用、老後の生きがいなどさらには若者の負担など多くの問題をもたらすものと考えられます。これらをうまくのりこえ、いかにして〝豊かな高齢化社会〟をつくりだしていくかが、今わたしたちにとって大きなテーマとなっています。

そこで、今月は〝老人月間〟であり、高齢化社会について特集してみました。

日本人の平均寿命は毎年伸びて、今年の厚生省の発表によると男性は74・22歳、女性は79・66歳で、世界最高の長寿国となっています。

わが国の平均寿命は、昭和30年代に入って急速に伸び始めました。一方、出生数も目立って減少し、終戦直後の第一次ベビー・ブーム期には年間260万人の赤ちゃんが誕生しましたが、昭和54年の出生数は165万人となっています。この結果、全人口に占める高齢者の数が著しく増大しており、各国に例を見ないほどのスピードで、高齢化社会に向けて進行しています。

本市では、昭和57年10月の調査で65歳以上の人が3280人と、市人口の6・5パーセントを占めています。しかし、京都府では昭和55年で10パーセント（全国9パーセント）を占め、過疎化する地域によっては20パーセントにのぼるところも出てきています。今後、この割合は急速に増え、厚生省人口問題研究所から出された「日本人口の将来推計」によりますと、昭和75年には16パーセントになると予測されています。そして、昭和90年には実に5人に1人が65歳以上になるといわれています。

人口構造の高齢化は、寿命の伸びと生活水準の向上によって、わが国だけでなく先進諸国に共通した問題であり、すでに高齢社会に到達しているヨーロッパ諸国では、13・5パーセント前後になっています。これに対して、わが国の高齢人口比率はまだ目立って高いわけでありませんが、昭和75年には16パーセントになると予想されるなかで、ヨーロッパ諸国の3～5倍の速さで高齢化社会が進行し、32年後の昭和90年には21パーセントという超高齢化水準に達すると予想されます。

こうしたなかで、働く人たちの負担の急増は避けられず、いま約7・5人の働き手が1人の老人を養う形になっていますが、30年余り先には約3・3人というように、生産年齢人口の負担は、加速度的にふくれあがることになります。

このように、わが国は、高齢化のスピードと、著しい高齢社会という他の先進諸国も経験したことのない二つの衝撃的な問題に直面していると言えます。そして、この高齢化社会の進展は、不確実、不透明な時代のなかで、ある意味で唯一無二の確実であることであり、また透明に見透せることであると言えるのではないでしょうか。

高負担化する年金

厚生省が一昨年に発表した厚生年金の財政再計算結果によると、昭和55年に約2百万人である厚生年金の老齢年金受給者は35年後には1千万人を超えるだろうと見込んでいます。

この結果、男子の場合で現在、10・6パーセントとなっている保険料率は今世紀末に20パーセント程度となり、制度が成熟化する40年後以降には35パーセント近くなるとされています。保険料負担でいうと昭和55年度に月額3400円であったものが、35年後には55年度価格で1万5000円を超え、5倍以上になることが示されています。しかしこのような高い保険料負担には、将来の世代は耐えられないだろうとの見方がされています。

急増する老人医療費

高齢化は、保険医療にもかなり大きな影響を与えます。長期的には年金が受ける影響の方が大きいが、短期的にはこの面への影響が大きいといわれています。

老人医療費が国民医療費に占める割合は昭和48年度には10・9パーセントでしたが、55年度には17・1パーセントに上昇し、70年度には40パーセントに達するだろうと予想されています。

老人医療費は一人当たりにすると、国民健康保険での54年10月調査で、1か月に2万6952円となっています。老人以外は一人当たり5794円ですから、老人はその四・六五倍になっています。老人は一般に健康のすぐれない人が多く、また回復もおそいので、医療費のかさむのは当然ですが、老人医療制度の定着とともに老人一人当たりの医療費も急上昇しているのがわかります。

とりわけ深刻なのは、寝たきり老人の問題で、その原因は脳卒中などの疾病、交通事故などさまざまですが、高齢者が寝たきりとなる確率は他の年齢層に比べると著しく高く、昭和50年度の42万人から、70年度には85万人になるだろうと推定されています。うち在宅は38万人から76万人に、特別養護老人ホームの入所者は4万人から9万人になるといわれています。

どう生きる▼過密高齢化社会

山村社会から都市社会へ、そして農山村問題から都市問題に移行し、過密の高齢化社会という深刻で大きな問題となりつつあります。都市における高齢化社会の進行は、高齢者福祉の問題から核家族化の中での経済的自立のための就労の問題、さらには生きがいの問題、あるいは学習問題などの形で、つまり、福祉から入って年金といった老人対策的なものから、就労、生きがい、教育といったような社会的問題として重視されてきています。このことは、都市の機能と社会構造維持の面から、高齢者が地域を支え、生きがいを感じられる、その存在意義が認められる条件づくりが課題であると言えます。

都市生活者の多くは、どこかの企業に勤めていて、企業のために働いてきて、定年を迎えたら何にも他に能がなかった、やるべき分野がなかった、あるいは準備もできなかったという人たちが、これから多くなるのではないでしょうか。

こうしたなかで、住宅政策はもちろん、定年延長や年金と就労をうまくかみ合わせた条件づくりとともに、地域に根ざした取組としての人材センターの確立、高齢者による地域コミュニティの充実と活性化、福祉サービスへの活用などの施策が積極的にすすめられる必要があります。

まだ能力を発揮できる、あるいは社会に対して貢献しえる人たちはしてもらうというシステムの確立とともに、個人においても何か自分でなし得るとか、社会に貢献できるとかいう自信をつける意味で、少くとも40歳代か50歳代までには、それ以降の社会への参加の準備も必要ではないでしょうか。

日本人口の高齢化（65歳以上人口割合　%）

年次	65歳以上人口割合	年次	65歳以上人口割合
昭和30(1955)	5.31	昭和95(2020)	21.82
35(1960)	5.72	100(2025)	21.29
40(1965)	6.28	105(2030)	20.86
45(1970)	7.06	110(2035)	20.97
50(1975)	7.92	115(2040)	22.00
55(1980)	9.05	120(2045)	22.09
60(1985)	10.14	125(2050)	21.12
65(1990)	11.63	130(2055)	19.85
70(1995)	13.62	135(2060)	19.17
75(2000)	15.57	140(2065)	19.42
80(2005)	17.10	145(2070)	19.82
85(2010)	18.79	150(2075)	19.64
90(2015)	21.12	155(2080)	19.04

資料：昭和55年度までは国勢調査結果、昭和60年以降は厚生省人口問題研究所『日本の将来人口新推計（昭和56年11月）について』による。

高齢化社会は女性の問題

女性は男性より寿命が長いということに加えて、夫婦の年齢差を考えると、一般的には10年以上はひとりで生きていかなければならないと思われます。65歳以上で配偶者の有無をみると、女性では66パーセントに配偶者がなく、男性では妻のいないものはわずか22パーセントとなっています。

現在すでに、ひとり暮らしの老人のうち80パーセントは女性であること、また親や配偶者などのねたきり老人の介護の90パーセントが女性という現状からみて、高齢化問題は女性にとって避けては通れない大きな問題であり、八〇年の調査では、六5%前後で、全国平均よりも若いのです。しかし地区別にみると、向日台の三%、物集女の四・二%程度のように少いところもありますが、西向日の一五・五%、向日の一二・三%というように高水準の地区もあり、高齢化のスピードと、著しい高齢社会という他の先進諸国も経験したことのない二つの衝撃的な問題に直面していると言えます。そして、この高齢化社会の進展は、不確実、不透明な時代のなかで、ある意味で唯一無二の確実であることであり、また透明に見透せることであると言えるのではないでしょうか。

若い人たちとの交流で　高齢者に力を

寺戸町西野辺　塩見喜一さん　67歳

高齢化社会、そして高齢者……、何となく厳しい響きが伝わってきます。せめて老後はゆったりと静かにと考えていた多くの人たちには、思いがけない時代を迎えたことになります。

しかし、よく考えてみると、長寿国という喜ばしい現象のあらわれの中で、すべての人々が高齢化社会へ向けて、どう生きればいいのかという問題について、避けて通るわけにはいかないと思います。

ある老人たちのサークルで、若い方の協力を得て大変成果があがっているのがありますが、そのなかでの高齢者たちの生き生きした活動ぶりを見ていますと、高齢者の活力はこうしたなかで育っていくのだということを知らされました。最近の高齢者の活動が、高齢者の範囲にとどまっている傾向にあるなかで、新しい方向を見出したような気がします。

実際には、高齢者の側から若者へ声をかけるのは難しいですが、若い人たちから差しのべられた手を、しっかり受け止める豊かな心を養っておくことが大切だと思います。若い人たちとの交流と協力、ここから高齢者の活力が新たな芽を吹くであろうと確信しております。

核家族化の中で　必要なお年寄りの知恵

上植野町堂ノ前　北村政子さん　44歳

〝コーン〟……コロコロコロ……「やったァー」

真夏の太陽が照りつける8月2日、団地っ子たちは高齢者教室のおじいさんやおばあさんから、始めてゲートボールを教えていただきました。

「とてもやさしかったよ」「もう一度したかったなァー」「また来ていいよと言ってくれたァ」とうれしそうな子どもの顔々々。

日頃、核家族のなかの子どもより、老人や兄弟の多い子どもたちの方が心ゆたかに育っていると思っていましたから、この日につくづくお年寄りと一緒に暮せる生活をいま一度考え、一日でも早くその準備をしなければと思ったひとときでした。

お年寄りの長い人生で学ばれた知恵や、多くの経験から得られたゆとりのある助言などにふれるたびに、若いわたしたちには及ばないことが何と多いことか。これは、共に生きてこそより一層発揮されるのではないでしょうか。

そのためには、相互に支え合いおぎない合う人間関係のあり方と、住宅事情の検討を願うものです。